ライフスタイルの変化と方言使用の変動
——東広島市高屋町の場合——

高　永　　茂

1. はじめに

高屋町は近年，急速に都市化の進んでいる地域である。巨大な社宅が建設されたり，多くの住宅地が造成されたりしている。このような新興の住宅地に住む人の多くは，他地域から転居してきた人たちである。人口の流入が絶えず続いている高屋町は，現在大きな社会的変動を経験しつつある地域と言える。そして社会の変化は自ずとそこに居住している人たちの言語面にも影響を与える。在来の居住者と他地域からの移住者の双方に，この言語的な影響は見られるはずである。このうち，移住者の広島方言習得の問題に関しては，神鳥武彦「新居住地方言の受容」（1989年『国語国文』第58巻第11号）において詳細な報告がなされている。本稿においては，従来の農業社会（以降，自然発生的集落と呼ぶ）で生活してきた人たち(注1)の言語使用に関して報告する。

在来方言の残存状況や全国共通語の浸透状況に関しては，陣内（1983）が福岡市の中学校を対象に調査を行なっている。陣内は福岡市を人口動態あるいは地域特性により4つの地域に分けて，男女差の観点から(注2)，地域ごとの比較を試みている。この研究によって都市化は方言使用を減らし，男女差も減少させる傾向にあることがあきらかとなった。筆者の行なった調査も，陣内と同様に，在来の広島方言の使用状況を記録・分析することが目的のひとつである。しかしながら，陣内が調査対象を若年層に限定していたのに対して，高屋町の調査では，各家庭の夫婦から回答を得ている。回答者の年齢層は幅広く，20歳代から80歳代までを含んでいる。年齢の上で多様な回答者を得たことによって，ライフサイクルの各段階における言語使用の状況を知ることができた。本稿では，広島方言の使用状況を分析するとともに，とくに男女差の観点からライフサイクルの段階ごとの比較も試みる。これによって，人が一生を通じて言語をどのように認識して使用するかという問題に，若干の手がかりを与えうるものと考える。

2. 自然発生的集落調査（1988年実施）の概要

(1) 調査対象地

高屋町は相当に広い地域である。高屋町全体を調査対象とすることは，調査期間・費用・人員の面で不可能であった。また，全体を対象にせずとも，高屋町を代表するような地域を選べば，高屋町在来の言語使用者から十分な数の回答を得られると考えた。そこで，今回の調査の対象地域は，高屋町を含む東広島市を詳細に記した『戸別記入東広島市精図』（1988年，中国地図出版株式会社）に記載されている地域のうち，図58，59，62，63に含まれる地域とした。実際には，西高屋駅前を中心に南北に2.5km，東西に3.5kmの地域である。この地域は，高屋町の農村地帯と商店街とが両方含まれる地域である。職業の面でも

多彩な回答者が得られることが期待できた。

なお，1987年には高屋町にあるマツダ株式会社の社宅を神鳥武彦と筆者が共同で調査した。社宅を対象にした調査については，神鳥武彦・高永茂「方言に対する好悪の意識―「広島方言」に対する場合―」（1988年『国文学攷』第120号）をご覧いただきたい。

(2) 調査票の配布と回収

調査では，上記の地域に含まれる全ての家庭を対象とした（ただし，明らかに転居者が生活していると思われるような，新設の団地は除いた。それは，今回の調査が自然発生的集落を対象とすることにしていたからである)。各家庭の「御主人」と「奥様」から回答を得るようにした。

調査票の配布と回収には，留置法と郵送法とを合わせた方法をとった。調査票の配布時には，調査員が戸別に各家庭を訪ね，調査の主旨を口頭で説明した後，調査票を預けた。回収は，7～10日ほど記入の期間をおいて，郵送してもらった。

配布した調査票の総数は，1010部（約505戸に配布）である。このうち，回収できた数は，695部である。回収率は68.8%となる。

在来の集落なので，圧倒的に広島県出身者が多い。広島県出身者の回答は588部であった（広島県出身者は全部で601人であったが，回答に記入もれがあるなどして13人の回答は全く分析に使用できなかった)。本稿の分析には，20歳代の回答者の資料は利用していない。これは，回答者の数がきわめて少ないためにとった措置である。

＜表1　広島県出身者の性別，年齢別構成＞

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上
男性（288人）	2.1%	14.6%	31.2%	22.9%	29.2%
女性（300人）	2.3%	20.0%	32.4%	23.0%	22.3%

(3) 質問文の内容

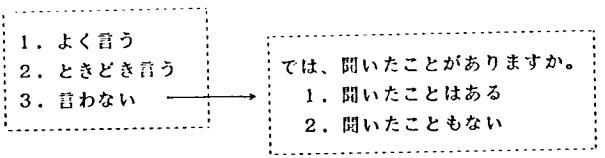
1988年の高屋町調査で使用した調査票は，全四節59項目から成っている。第一節から第三節までは，広島方言の使用状況を質問している。第四節では，回答者の性別，年齢，出身地などのいわゆるフェイス・シート（八項目）に関して質問している。本稿で取り上げるのは，このうち第一節で質問した項目の分析結果である。

〔1〕 スイバリ（皮膚に刺さった小さなとげ）
〔2〕 メグ（壊す）
〔3〕 （歯が）ハシル（歯が痛む）
〔4〕 （腹が）ニガル（腹が痛む）
〔5〕 ヨイヨ（全く）
〔6〕 テゴースル（＜仕事を＞手伝う）
〔7〕 ミテタ（＜品物が＞無くなった）

〔8〕 ハセル（<物の間に薄いものを>はさむ）
〔9〕 タワン（届かない）
〔10〕 フーガワリー（かっこうが悪い）
〔11〕 ミヤスイ（<物事を行なうに>容易である）
〔12〕 イタシー（<精神的にあるいは肉体的に>難しさを感じる）
〔13〕 イツイキ（常に）
〔14〕 ハミ（まむし<蛇>）
〔15〕 ハブテル（怒ってふくれる）
〔16〕 ヤネコイ（疲れてからだがつらい<辛い>）
いずれも，広島方言で代表的だと思われる方言形を選出した。

調査票では各節ごとに質問の仕方が異なっている。第一節では下記のような質問形式を取った。次の例は，「メグ」（物を壊す）を質問したものである。

「物をこわす」ことを「物を『メグ』」と言いますか。



回答者は，まず左の「1」「2」「3」のいずれかに○を付ける。そして，「3」に○を付けたならば，右の補助質問に移り，いずれかに○を付ける。ただし，「ハブテル」と「ヤネコイ」とにおいては，右の補助質問の箇所を「では，どのように言いますか」と具体的に語詞を記入してもらった。

分析の段階では，補助質問の部分は細分化していない。つまり，「よく言う」，「ときどき言う」，「言わない」の三グループにまとめている。

3. 年齢間の変化

年齢ごとに集計した全体の傾向から述べる。

ほとんどの方言形において，老年層から，中年層へ向かって使用者の減少する傾向が見られる。方言の衰退を如実にあらわしていると言える。

<表2 「言わない」の比率>　　単位は%

調査項目	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上
スイバリ	5.9	3.2	2.9	1.3
メグ	12.6	9.0	7.4	1.9
ハシル	46.1	31.0	15.9	6.5
ニガル	43.7	25.4	18.3	9.0
ヨイヨ	31.0	27.0	23.7	21.2

テゴースル	47.1	41.1	27.3	14.7
ミテタ	14.6	9.6	8.9	3.8
ハセル	4.9	2.7	3.7	3.2
タワン	1.0	3.2	3.7	4.5
フーガワリー	14.7	10.6	5.9	4.5
ミヤスイ	1.9	1.1	5.9	2.6
イタシー	17.5	12.3	14.8	4.5
イツイキ	70.9	64.0	51.5	32.9
ハ　ミ	18.4	13.2	5.1	0
ハブテル	0	1.1	5.2	1.9
ヤネコイ	62.1	41.9	40.3	25.8

スイバリの項目で「言わない」の割合がどのように変化しているかを見ると，60歳代以上は1.3%，50歳代2.9%，40歳代3.2%，30歳代5.9%というように，わずかながら減少はしているものの，その変化は，1.3%から5.9%までの幅で，小さなものである。スイバリは，現在でも各年齢層でよく使用されている語詞なのである。これと同様の傾向がハセル，タワン，ミヤスイ，ハブテルにおいて見られる。

スイバリに比べ，ハシルの変化は，かなり大きい。60歳代以上では，「言わない」の割合が6.5%に過ぎない。それが,50歳代になると15.9%,40歳代31.0%，30歳代46.1%と急速に増加する。60歳代以上の回答者は，ほとんどの人が歯が痛むことを表現するときには，歯がハシルを使っているのに，30歳代ともなると，約半数の人が使用しなくなっているのである。ハシルのように，年齢が下がるにつれて急激に使用者が減少する方言形としては，ニガル，テゴースル，イツイキ，ヤネコイがある。ハシルやニガルはとくに減少率の大きいものである。ハシルは「(歯が) 痛む」，ニガルは「(腹などが) 痛む」を表現する語である。診療時に医師と会話する場面や，医薬品のコマーシャルを通じて共通語が普及したためか，「痛い／痛む」という語詞に，その地位を急速に譲りつつある。

スイバリやハシルの中間に位置する語詞もある。ヨイヨにおいては，「言わない」の割合が60歳代以上で21.2%である。この年齢層の人も，ヨイヨはあまり使用しないようである。さらに，50歳代23.7%，40歳代27.0%，30歳代31.0%というように，「言わない」の割合は増加する。年齢が下がるにつれて，次第にヨイヨの使用者が減少していく様子がわかる。隣接する年齢層どうしの変化は少ないが，全体を通してみると，21.2%から31%まで変化しているのである。ヨイヨと同じ傾向は，メグ，フーガワリー，イタシー，ハミにも見られる。

以上,三つの傾向について述べてきた。それぞれの傾向をまとめると,次のようになる。

①方言が衰退する中で，いまだその勢いが衰えることなく，使用されている。話者は，さほど方言色を意識せずに使用しているのではなかろうか。これらの語詞は，いわゆる地域共通語として通用している。この傾向を示す語を「微小変化型」と呼ぶことにする。

(語詞) スイバリ，ハセル，タワン，ミヤスイ，ハブテル

②共通語に取って代わられながら，急速にその姿を消しつつある語詞がある。このような傾向を示すグループを「激減型」と呼ぶ。

（語詞）ハシル，ニガル，テゴースル，イツイキ，ヤネコイ

③微小変化型よりも変動が大きいけれども，激減型よりも減少する速度が緩やかな語詞がある。これらの語詞は，しばらくの間，共通語と共存しながら，緩やかに共通語と交替していく語詞である。これを「漸減型」と呼ぶ。

（語詞）メグ，ヨイヨ，ミテタ，フーガワリー，イタシー，ハミ

4. 社宅居住者との比較

上記の分類の妥当性を検討してみよう。

高屋町には，伝統的な自然発生的集落に隣接して，新興の住宅地が存在する。その中でも，最大級のものがマツダ株式会社の社宅である。マツダ株式会社の社宅を対象とした調査結果を，神鳥が「新居住地方言の受容」として報告している。神鳥（1989年）においては，社宅に居住している広島県出身者の回答をもとに，性別，年齢，学歴の観点から，本稿と同じ16の語詞を三群に分類している。(注1)

A群　スイバリ，ハセル，タワン，ミヤスイ，ハブテル

B群　メグ，ヨイヨ，ミテタ，フーガワリー，イタシー

C群　ハシル，ニガル，テゴースル，イツイキ，ハミ，ヤネコイ

神鳥は，この分類をもって，16の語詞が広島方言の中で置かれている状況を推定しようとした。

そこで，神鳥の分類を本稿の第3節において行なったものと比較してみる。社宅居住者の場合，回答者の年齢構成を見ると，20歳代と30歳代とが大半を占めていた。これに対して，自然発生的集落の回答者は30歳代以上の年齢層から得られている。このような年齢構成上のずれは，ある意味で好ましい。両者を対照させることにより，青年層から老年層に至るまでの資料が出そろうからである。

神鳥のA群，B群，C群はそれぞれ，(注3)本稿の分類における微小変化型，漸減型，激減型に対応していると考えられる。両者を比較すると，A群と微小変化型に属する語詞は，まったく同じであった。B群と漸減型，C群と激減型に属する語詞では，一語だけ異同があった。この一語とは，「ハミ」である。ハミを実際に見ることのできる環境に生活しているか否かが，両調査の結果に現れていると考えられる。ハミ以外の語詞が二つの調査において一致していたことから，この分類は妥当性の高いものと言えよう。

5. ライフサイクルと男女差の変化

人間は一生を通じて，常に同じ生活様式や意識を持ち続けるとは限らない。社会学には，家族組織の周期的な変化を研究する分野がある。家族構成の周期的移行や家族の対外的な活動の変化など，さまざまな観点から研究が進められている。この家族周期研究（家族のライフサイクル研究）の結果，周期を段階に区分することが(注4)可能であり，周期の各段階ごとにそれぞれ特徴があることがわかっている。本稿では，家族周期論の詳細については触れないけれども，重要な点は，家族や家族を構成する人間の一生が社会・経済的な観点からいくつかの段階を経ながら変化していくということである。

ライフサイクルの各段階における生活の変化は，日常使用している言葉にも影響を与え

ていると考えられる。言葉は，生活の中で使われるものである。生活環境が変化すると，言葉の使い方や言葉に対する考え方もそれにつれて変化することがあるだろう。子どもの頃は，何の恥ずかしさもなく使っていた方言が，思春期や青年期になるとなんとなく気恥ずかしく感じられることもある。あるいは就職して実社会に出ると，方言を話すことが相手からの信頼を損なうことになるのではないかと心配するようになるかもしれない。

そこで，前述の三グループそれぞれについて，「言わない」と回答した比率の平均を算出して年齢層間の比較を行なう。(注5)

男性と女性の平均値を年齢層ごとに並べると，<図1>のようになる。微小変化型，激減型，漸減型においてそれぞれ特徴的な傾向が見られる。微小変化型(図①)においては，各年齢層に男女差がほとんどない。これらの方言形は，やはり年齢の影響を受けにくいと考えられる。これらの方言形は，使用者が多く男女差が少ない点から考えて，広島方言の話者が一生を通じて使い続けていくものなのであろう。話者の中には，これらの語形が広島方言であることに気づいていない場合もあるかもしれない。

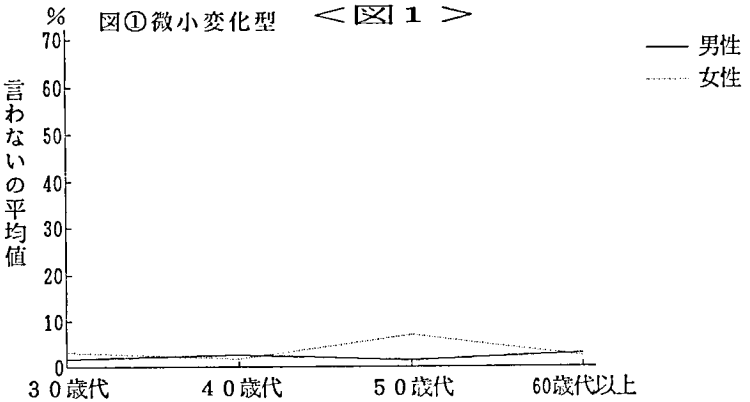
漸減型（図③）の40歳代から60歳代以上までの年齢層においては，さほど大きな男女差の変化は見られない。男性よりも女性の方が，方言形の使用が少ないけれども，その差は40歳代以上においてはほぼ一定の値を保っている。漸減型では30歳代において，男女間の開きが急に大きくなっている。30歳代の女性は，漸減型に属する方言形に対して，男性や他の年齢層の女性よりも強く方言色を感じはじめているようである。壮年期の初期に位置する女性は，方言に対して他の年層よりも敏感になっているのかもしれない。(注6)

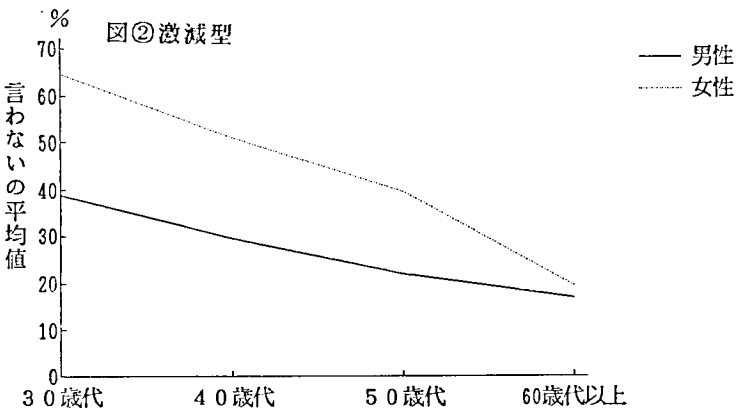
激減型（図②）においては，微小変化型，漸減型の方言形に比べ，顕著な傾向が見られる。この型では，50歳代から60歳代以上へかけての変化が注目される。30歳代から50歳代まで20％以上の開きがあったものが，60歳代以上になるとほとんど男女差がなくなる。これらの方言形に対する態度が，60歳代以上の男性と女性とはよく似ている。

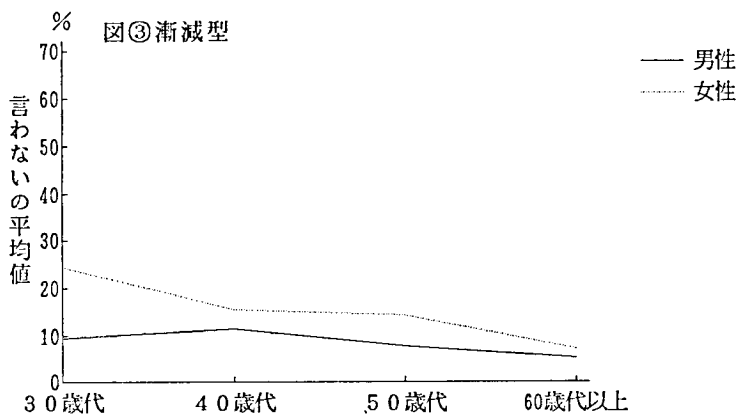
60歳代以上の場合，微小変化型，漸減型，激減型のすべてを通じて，男女差がほとんど見られないことになる。この原因を直ちに確定することはできないにしても，次の二つのことが考えられる。(注7)

(1)方言への回帰現象。

60歳代以上の回答者には，職業の面で第一線から退いている人が少なくないと考えられる。フェイスシートの職業の回答を見ても，「無職・その他」の回答が多いのはこの年齢層である。職業上の煩わしさから解放され，年齢を重ねるにつれて，自分の生まれ育った文化へ愛惜の念を募らせるのではなかろうか。方言は，文化の中でも，人びとが強くアイデンティティーを感じる対象の一つである。地域社会で生活する場合には，コミュニケーションの手段（地域共通語）としてたいへん重要な役割を果たす。地域社会への帰属意識が増すと，その地域社会に特徴的な言語特徴を好んで使用するようになるという指摘はLabov (1984) でもなされている。また，方言が地域共通語としての性格を帯びるにつれて，男女間に言語的な相違を生み出さない方向へと，話者は動くのであろう。(注8)


%
図①微小変化型
＜図１＞
男性
女性
言わないの平均値
70
60
50
40
30
20
10
0
３０歳代
４０歳代
５０歳代
60歳代以上


%
図②激減型
男性
女性
言わないの平均値
70
60
50
40
30
20
10
0
３０歳代
４０歳代
５０歳代
60歳代以上


%
図③漸減型
男性
女性
言わないの平均値
70
60
50
40
30
20
10
0
３０歳代
４０歳代
５０歳代
60歳代以上

(2)共通語教育とマスコミの影響。

少年期から青年期にかけて，言語使用の基礎をかたちづくる言語形成期という時期があると言われる。現在の60歳代以上の話者とこれより年齢層の下の話者との間では，①言語形成期ごろに受けた学校教育の内容，②個人が受け取るマスコミからの情報量，の二点において相違が見られる。50歳代以下の年齢層では，言語形成期において，学校と家庭の双方で共通語の影響を強く受けている。学校においては共通語による教育が行なわれ，家庭においては共通語がテレビから流れてくる。共通語と方言を使い分ける二重の方言生活をすればよいけれども，重心が次第に共通語(注9)へと移っていくことは避けられない。これに対して，60歳代以上の人たちが言語形成期を過ごしたのは1945年前後である。この時期は，戦後の混乱と教育環境の再整備の時期であり，マスコミもいまだ発達途上の段階にあった。このような社会環境の中で，共通語化の波をかぶりながらも，地域社会内の方言生活のレベルでは，より多くの方言を保持しうる環境が存続していたと考えられる。このため，激減型や漸減型に属している方言形も，60歳代以上の話者の間では地域共通語的な性格を有しているのであろう。

6. おわりに

分析した結果を整理すると次のようになる。

(1)多くの語詞において，方言使用者の減少傾向が見られる。しかし，年齢層間で使用者の割合がほとんど変化しない語詞もある。16の方言形の使用状況は，大きく三種類に分類できる。

(2)男性と女性との間で使用状況の違いを見せる語詞がある。男女差は，方言の語詞が衰退する際に生じる一つの現象と言える。これらの語詞は，同一世代内で位相差を持ち始めていると考えられる。

(3)ライフサイクルの各段階における男女差を比較すると，微小変化型，激減型，漸減型においてそれぞれ特徴的な傾向が見られる。そのなかでも，激減型の60歳代以上で男女差が小さい点が注目される。本稿においてこの原因を特定することはできなかったけれども，次の二点が指摘できる。①方言への回帰現象ではないか。60歳代以上の人が，地域社会優先のライフスタイルへと移行するにつれて，方言への愛着も増してくると考えられる。②共通語教育とマスコミからの影響が比較的少なかったのではないか。60歳代以上の人が言語形成期を過ごした時期は，共通語化の波をかぶりながらも，地域社会内の方言生活のレベルでは，より多くの方言を保持しうる環境にあったと考えられる。

自然発生的集落の居住者は今後，農村型→都市型の方向へとライフスタイルの変化を被ることが予想される。ライフスタイルの変化にともなって，ライフサイクルの各段階における男女差も変化する可能性がある。この点に関しては，長期にわたる追跡調査が必要である。今後の課題としたい。

注

（注1）1987年度の調査については，神鳥武彦「新居住地方言の受容」（1989年『国語国文』第58巻第11号）において調査結果の一部を報告している。

自然発生的集落の呼称を採用するにあたって，下記の文献を参考にした。

木内信蔵編　昭和42年『都市・村落地理学』　朝倉書店。

農林統計協会発行　昭和52年『日本の農業集落』。

（注２）陣内正敬　1983年「方言使用の地域差・男女差―人口急増都市・福岡に見られる言語接触―」（『九大言語学研究室報告』第４号　pp.27―38）。

（注３）社宅と自然発生的集落との生活環境の相違が，方言認識と方言使用とに影響を与えていることも考えられる。この点に関しては，機会をあらためて報告したい。

（注４）森岡清美　1973年『家族周期論』　培風館。

森岡清美編　1977年『現代家族のライフサイクル』　培風館。

室山周平・姫岡勤編　1970年『現代家族の社会学―成果と課題―』　培風館。

（注５）「各方言形ごとの数値÷方言形数」を各年代ごとに算出した。

（注６）田原広史　1988年「東関東における共通語化の状況」（『日本学報』第７号 pp.121―145）。

（注７）「言わない」以外の選択肢においても60歳代以上の男女差は，小さい。「よく言う」「ときどき言う」の数値が男女間で似ている。数値は，60歳代以上のみのパーセント。

調査項目		よく言う	ときどき言う
スイバリ	男	84.1	14.8
	女	91.3	7.2
ハセル	男	81.8	15.9
	女	82.1	13.4
タワン	男	84.1	11.4
	女	85.3	10.3
ミヤスイ	男	83.0	13.6
	女	80.9	17.6
ハブテル	男	83.0	13.6
	女	88.2	11.8
ハシル	男	72.1	20.9
	女	76.5	17.6
ニガル	男	57.5	32.2
	女	55.9	36.8
テゴースル	男	59.3	30.2
	女	57.8	21.9

調査項目		よく言う	ときどき言う
イツイキ	男	26.8	40.2
	女	41.0	26.2
ヤネコイ	男	42.0	35.2
	女	37.3	32.8
メグ	男	79.5	19.3
	女	79.4	17.6
ヨイヨ	男	52.9	28.7
	女	48.4	26.6
ミテタ	男	86.4	11.4
	女	82.6	11.6
フーガワリー	男	71.6	23.9
	女	72.7	22.7
イタシー	男	72.7	22.7
	女	77.6	17.9
ハミ	男	88.6	11.4
	女	92.5	7.5

（注８）Labov, *Sociolinguistic Patterns*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 1984.

（注９）馬瀬良雄　1981年「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」（『国語学』第125集）。

【謝辞】調査にあたっては，東広島市高屋町の皆様方に多大なご協力を得た。また，本稿を成すにあたっては，広島大学学校教育学部教授神鳥武彦先生から助言をいただいた。ここに名を記して，深謝の意をあらわすものである。